

肺小細胞癌の甲状腺転移を診断しえた1例

地方独立行政法人神戸市民病院機構 神戸市立医療センター西市民病院

臨床検査技術部¹⁾, 同病理診断科²⁾

常本志帆(CT)¹⁾, 吉田澄子(CT, IAC)¹⁾, 小出優希(CT)¹⁾, 岡村俊佑(CT)¹⁾, 村井志織(CT)¹⁾, 弘田大智(CT, IAC)¹⁾, 中彩乃(CT)¹⁾, 山下展弘(CT, IAC)¹⁾, 勝山栄治(MD)²⁾

【はじめに】

我が国での甲状腺腫瘍における転移性腫瘍の割合は約1%で、原発巣としては腎臓、次いで肺や乳腺が多いと報告されている。今回我々は、穿刺吸引細胞診にて甲状腺への肺小細胞癌の転移を診断しえた1例を経験したので報告する。

【症例】

60歳代、男性。肺小細胞癌の治療中に他院で施行したCTにて甲状腺右葉に腫瘍を指摘され、当院に紹介となった。超音波検査にて境界明瞭粗雑で12×29×15mmの不整形低エコー病変を認め、穿刺吸引細胞診が施行された。

【細胞所見】

血性および壊死物質、炎症性細胞を背景に、異型細胞が孤在性に出現。異型細胞は裸核様でN/C比が高く、核腫大や核形不整、微細な顆粒状のクロマチン増量を認めた。

【免疫染色所見】

細胞診断学的に小細胞癌を疑ったため、液状化細胞診の残余検体より免疫染色を施行した。Synaptophysin, ChromograninAともに陽性であり、小細胞癌と診断した。既往の肺癌の転移に矛盾しなかった。

【結語】

今回、液状化細胞診検体を使用して免疫染色を施行したことにより、肺小細胞癌の甲状腺転移と診断しえた。組織型推定に限らず、液状化細胞診による免疫染色の併用は有用であると再認識した。